

# 志津川 偉人伝

養蚕・生糸生産、飢饉救済、道路開削…、私財を投じ、志津川発展の礎を築いた

## 山内甚之丞

1695 1778



昇仙の杜 弥生公園——甚之丞のレリーフや記念碑が建つここは、山内家の墓所を史跡公園として整備したもの。甚之丞が名字帯刀を許され、仙台へと向かう際に渡ったといわれる昇仙橋も公園内に再現されている

入谷の生糸は 京都の西陣へも。 仙台藩の養蚕振興に 大きな足跡を残す。

今から三百年ほど前の江戸元禄時代、志津川近辺は、米の生産量は少ない上、最大の収入源だった金の産出が底を付き、水産物も現在のような流通商品とはなりえず、住民は生活に困難をきたしていました。特に、金の産地として知られていた入谷村は、一時は「入谷千軒」ともてはやされるほどのゴールドラッシュに湧いたこともありましたが、この頃には金はすべて掘り尽くされてしまい、これに代わる新しい産業を興す必要に迫られていました。

伊達藩では、折りしもの好況も手伝って、生糸の消費が急激に増加し、藩内の貨幣が流出し銀不足になるなどから、藩内での生糸の生産は早急の課題でした。当時若千二十歳の山内甚之丞は、養蚕の先進地・福島県伊達郡川俣に出向き、桑の育成から養蚕、生糸の製造法までを習得。帰郷後、その養蚕技術をすぐに入谷に広めました。繭を集荷して生糸に紡いだ後の売りさばきも成功をおさめた甚之丞により、村は一躍活気づき、志津川は養蚕・生糸生産の中心地になりました。仙台平の袴は入谷産の生糸でなければならなかったと言われるほどで、入谷産生糸の銘柄「金華山」の品質は、京都西陣と直接取引さすほどでした。



雲南神社——もともとは各地雲南観世音として観音様を祀っていたが、天明2年(1782)に蚕観音として養蚕の神様・甚之丞を合祀。甚之丞の命日3月2日が祭日とされ、甚之丞の徳を称えている

”入谷には餓死者が一人も出なかった。” 粟(あわ)一斗を400人の村民に配り、凶作を救う。



昇仙の杜 弥生公園——甚之丞のレリーフや記念碑が建つここは、山内家の墓所を史跡公園として整備したもの。甚之丞が名字帯刀を許され、仙台へと向かう際に渡ったといわれる昇仙橋も公園内に再現されている

甚之丞の郷土への並々ならぬ愛と情熱は、養蚕ばかりではなく、さまざまなことに向けられました。例えば、町内随一の名刹「大雄寺」の山門を寄進したり、宝暦五年(一七五三)の凶作・大飢饉では、飢えに苦しむ人々約四百人に、一人当たり粟一斗を配り、救済したりしました。また同じ宝暦年間には、私財を投じて、入谷から水堀峠を越えて米谷に至る六里の道のりを、述べ七千人を動員して開削整備し、米谷道(水界道路)の前身を造りました。



大雄寺山門——宝暦年間に甚之丞が寄進したもの。桃山様式の建築物で、町の文化財に指定されている

産業・文化の交流路 ”陸前のシルクロード”を。 子・甚兵衛も、養蚕振興・道路開削に心血を注ぐ。

甚之丞の子・甚兵衛も父の遺志を継ぎ、養蚕振興や街道整備に貢献しました。蚕業指導書「民家養蚕記」の出版、十万株の桑木の福島からの移入をはじめ、天明の飢饉には父になら



新水界トンネル付近の国道398号——甚之丞が行った水界道路整備は、明治の新道開削から現在の国道整備へと受け継がれていった

って、数百人を救済しました。また桑の苗木輸送のために、莫大な私財を投じて、羽沢道、弥惣峠、坂貝峠などを開削しました。山内親子の整備した道は、入谷の生糸を京都まで運び、まさに、陸前のシルクロードとして、新しい産業や文化を入谷にもたらしたのです。

## 仙台藩製塩の父 高橋 藤兵衛

たかはし とうべえ

今から三百年ほど前の江戸中期、仙台藩の製塩法は大量に燃料を消費する直煮式で、効率の悪いものでした。そこで、藩に選ばれた十日町の高橋藤兵衛ら九人は、士分(武士の身分)として播州赤穂(兵庫県)に出向き、製塩技術を学んできました。そして苦心の末、一六八二年には仙台藩の許可を得て波路

上(現在の気仙沼市階上岩井崎)に製塩場を作りました。そのときの出資者の四割が志津川の人で、その後も志津川の人々によって製塩が続けられ、それは明治期まで及びました。藤兵衛の播州流製塩法は、その後、各地に広まり、藩内の製塩業を成功に導きました。また、志津川は山林資源に恵まれているため、林や戸倉では直煮式も盛んに行われ、年間数万俵の生産を上げるほどで、志津川が伊達藩の製塩に果たした役割はとても大きかったです。

## 西城平八

さいじょう へいち

志津川の養殖で、昔から知られているのは鮭のふ化放流です。明治十年頃(一八七七)、水戸出身の海門寺住職・高須観亮のすすめで、西城平八が中心となり、長年研究を重ねた後に、水尻川と八幡川に稚魚を放流し、鮭の天然ふ化を試みました。三年後の秋には、鮭が遡上することに成功。明治二十六年(一八九

三)より、本吉村では八幡川・水尻川の鮭の漁獲権を年間二百円で平八に任せました。その後も平八は、住民の乱獲や海鳥が卵・稚魚をついばむことを監視するなど、鮭の保護一筋に生き、鮭漁業の道を築きました。昭和十年頃(一九三五)から鮭の数が減り、一時は鮭の姿を見ることができなくなりましたが、町では、昭和五十四年(一九七九)に八幡川上流の小森地区にふ化場を作り、稚魚を放流するようになってから、昔のように鮭がのぼってくるようになりました。

## 製糸業発展の父 高橋長十郎

たかはし ちやうじゅうろう

明治初期には各家庭で蚕を育て、糸を取っていました。明治初年から昭和初期にかけて、養蚕業の発展に尽力したのが十日町の高橋長十郎です。長十郎は、明治十七年(一八八四)に本吉郡蚕糸業組合を結成。翌年には「座繰製糸共同揚返場」を作り、製糸業を開始。当時の蚕糸業界は、馬力に制限がある水力式が主流でしたが、当時四十歳の長十郎は率先してアメリカ製ボイラーの輸入を計画。反対する周囲を説得し、ついに明治二十

一年(一八八八)八月に、佐藤久作ら約三十人の生糸製造業者とともに、わが国初めての機械座繰り製糸工場 旭製糸株式会社を創立。宮城県内では二番目の株式会社組織で、洋式ボイラーを動力とする工場としては、民間では国内最初と言われています。最新式の機械を備えた工場は百人繰と称され、四百五十人ももの従業員をかかえるほど大規模なもので、ここで作られる生糸銘柄「金華山」は、外国にまで輸出され、エッフェル塔完成時のパリ万国博覧会ではグランプリを受賞するなど、世界最高の品質を誇っていました。

## 産業振興と町の発展に尽力 佐藤久作

さとう きゅうさく

五日町の佐藤久作は、高橋長十郎と共に旭製糸株式会社を創立し、製糸業の発展に貢献する他、町内の植林事業や陸前東浜街道の一部道路整備にも力を注ぐなど、町の開発に努めました。大日本帝国憲法が公布された明治二十二年(一八九九)一月には、久作や高橋長十郎が発起人となり、本吉郡九ヶ村有

志懇談会を呼びかけ、本吉青年議会を発足させるなど、二十六歳の若さながらも久作は、翌年開かれる帝国議会に向けての政治的手腕を発揮。時代の脚光を浴びて進展する製糸会社を背景にして、志津川一帯の民権運動の中心を担っていました。明治二十二年から二十三年間にわたり、志津川町長や宮城県議員、郡会議員などを務める中で、志津川に初めて消防組をつくったり、消防組頭会長になって町の防災に力を入れるなど、町や県の発展に尽くしました。

参考文献：「志津川町誌資料」(一)平成三年発行、「旭製糸の歴史」(志津川町教育委員会)「志津川町文化財保護委員会」昭和五十八年発行、「志津川物語」旭ヶ浦物語、増補改訂(佐藤止雄著)昭和六十年発行